
ヤキトリ王国ストーリー

水谷風狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤキトリ王国ストーリー

【Nコード】

N3369P

【作者名】

水谷風狼

【あらすじ】

魔王の風格を無視した、斬新かつ意味不明なRPGをあなたにとりあえず読むといいと思います。

主人公がこちらを見ている。

あなたはどつする！？

▼クリックする

▼読む

▼見なかったことにする

さあ、どうするんだ!!

前編。 (前書き)

イラスト[♪]とするほどのギャグです。
長いですがお気軽にお楽しみくださいませ。

前編。

ヤキトリ王国ストーリー

ヤキトリ王国ストーリーへようこそ！
どのデータをロードしますか？

1 ・本編クリア

2 ・タレ L V ・5 現在地 魔王城

3 ・新規データ作成

4 ・新規データ作成

データ 3 をロードします。よろしいですか？

チャラリラリン

「王子は本当に格好いいわ！」

「王子は最高よ！」

「あら、王子王子ってよく言いますこと。王子様は私のものなんですからね。」

「なんですって？」

「邪魔よ、王子が見えないわ」

あちらこちらに飛び交う、貴族のお嬢様方の求・王子コールに、タレ王子は耳まで真っ赤になりながらも勢いよく剣を振っていました。すばんと爽やかな音を立てて、目の前の木切れの上半分が真っ平らな切り口を見せつつ空中を舞いました。それが地面に落ちるや否や、またもや「ナイスファイトユー！」と叫びたくなるような気分のいい回転切りが覗き見の衆をわっと沸かせます。回転切りは、タレ王子の得意技です。

タレ王子は、ここヤキトリ王国の王様『トテムウマーシ7世』の長男です。

小さい頃から学問も剣術も期待されて頑張ってきたタレ王子。思うように学力が伸びず魔術はさっぱりだけれど、剣の腕なら王様を抜かすほどの勢いでぐんぐん上達しています。近頃は自分から、各地の魔国の魔王を討伐しに行くほどの腕前に、お嬢様だけでなく他の剣士達も惚れ惚れとしています。

それに、タレ王子はとても温厚そうな、おっとりとした顔立ちをしています。

金髪の柔らかなまき毛の前髪に隠れて、穏やかな雰囲気を出している細い目。透き通るような蒼の視線に見つめられると、お嬢様たちは酔っぱらったように頬を赤らめて、それを隠そうとするのか両手をそこに押し当てて、つい特別な笑顔を見せてしまいます。

運動量のわりに華奢な手足はいい具合に焼けていて、とつても……

バリイイイイン

「うそばかり言わないで下さいよ、ナレ子さん！僕のどこが金髪碧眼なんですか。大体、毛生えてないし！」

ああ、これは王子。いいところにいらっしやいましたね。今丁度あなたについて紹介していたのですが……何か不満があったようで

すね。(おかしいな、美化したはずなのに……)

「ナレ子さんココロの声口から出ちゃってるよ！っていうか美化じやなくて完全に別の人語ってたでしょ今の」

そんなことありません。これが王子の基本像ですよ。覚えておいてくださいと助かります。

「人間の王子はそれが定番かもしれないけど僕は違うんですよ！なんでそんな爽やか王子がタレなんて名前付けられてるの、おかしいでしょ。ヤキトリ王国って所から見ても」

しかし王子、私から見たときとヤキトリ王国って所から見たときと両方語るのは上級者のテクニクが必要なんですよ。覚えておいてくれると助かります。

「ナレ子さん。昨日お酒飲んだ？飲んだよね？しょっぱなから言うてること分けわかんないよ。しっかり！」

糖質70パーセントオフじゃまだきつかったかしらん。

さあ王子、ツッコミの前に自己紹介してください。私にはどうやら荷が重すぎたようです。

「わかりました。ついでにナレ子さんのもしてあげましょう」

あ、そうですか？ではお言葉に甘えて。

「えーと、こんにちは。僕はここヤキトリ王国本家、トテムウマーシ家のタレ王子です。誕生日は不明、血液型はありません。体はタレでできてます。得意技は『からめとる』です。体はタレでできていますみなさん。体はタレ」

王子、私の紹介はまだですか？

「ナレ子さんが作った誤解を解こうと今必死なんですよ。全くもう。本当のことなんて、回転切りができるくらいじゃないですか。」

モてるのも本当の話ですよ。金髪碧眼以外は真実です。

「そしてこちらのナレ子さんが……」

「王子ー！」

どすっ

ほとばしる血。遠のく意識。何かがどさりと倒れた音がした。

「あら、御免遊ばせナレ子さん。大丈夫ですか、鼻血。」

顔面になぜか頭突きを食らいました。王子を呼びに来たお嬢様の目には私の姿はブルタブくらいにしか移らなかったようです。ああ、またティッシュを消費しなくてはならない。

「王子様、王様達がホールにお呼びですわ。」

「え、ホントですか。今すぐ行きます。ほらナレ子さん、気絶してる場合じゃありませんよ。きっと何かあったんだ」

私の自己紹介は……？

そんな私のつぶやきはむなしく空に散っていきました。ぷるぷるしたタレの感触に手を引かれて、わたしはやっとこさ立ち上がったのでした。

私の自己紹介は後回しですか。

チャラリラリーン

―於― トテムウマーシキャッスル―

「王様、これをご覧下さい！」

私は頭と頭をくつつけあってひしめいているヤキトリの群れの中に潜入しました。なんか髪の毛ギトギトするけど。

「あ、何と……これは」

え、なになに。どれどれ。私も見たいです。

「今朝方、裏エントランスの郵便受けその9に入っていたものです」
郵便受け9個もあるんですね。裏玄関なのに。

私が覗き込んでみると、そこには薄汚れてしわくちゃになった古新聞がありました。何か書いてあるようですね。

「助けて いじめ ネギマ姫 クシ王」

赤いフェルトペンのようなもので書かれております。読みにくいの

は、ばれない様に考慮した結果でしょうか。

これ、SOSじゃないですか！という私の叫びに、

「え、SOSだと？そんな意味が隠されておったのか。君は天才だ！優秀な推理をありがとう！」

王様、あなたと握手できるのは非常に光栄ですが、そのくらい見りやわかると思いますよ。助けてってバリバリ書いてあるし。ましまじゃん。

「はっ！そんな事にも気づかないなんて、私はなんて気遣いのない王なんだ。くっ」

あーはいはい、悔しがってなくていいですから。それより、どうするんですか。このままほっとくわけにいかないでしょう。

「はっ！そういえば私、古新聞の記事見てて中身見てなかった！」

「王様。どうやらネギマ姫という女性が、クシ王という魔王にさらわれているようです。」

「な、なんだってー！？」

家臣の皆様はハプニング時のお約束の台詞を口をそろえて叫びました。ヤキトリのくせに息がびったりなのはどうしたことでしょう。「クシ王だって？クシ魔王のことですか？」

え、誰ですか。そのいかにもひ弱そうな名前の魔王様。

「クシ魔王といえば、三年前から討伐命令を下したつきり誰もいなくてそのままになっている食物界凶悪四天王の一人じゃないか！」

「な、なんだってー！？」

な、なんだってー！クシなんてそんなすぐ折れちゃいそうな名前の人が四天王だなんて！

「そしてネギマ姫は、トテムウマーシ家の分家、シャリシャーレ家の一人娘ですよ！」

「うむ。タレ王子の婚約者（補欠）にも選ばれておる」

「な、なんだってー！？婚約者に補欠なんてあったのか！」

普通はありません、そんな制度。

「つまり、ネギマ姫がクシ魔王に監禁され、いじめられているとい

うことだな！」

結論への道のりが長すぎです。どうにかなんないんですか王様。

「な、なんだってー!?」

もういいですよ、そのリアクション。おつかれ。

「これはうかうかしてはいられない、いざ補欠が必要になったときのタレ王子のためにも、クシ王の魔の手からネギマ姫を救い出すのだ！」

「おおー！」

て誰が？

「えー……誰か行ってくれない？」

え、あなた行かないんですか？

「王が国を離れるというのは好ましくない。国内の争いごとに対処しなければならぬし、隣国への体面も考えなくてはならぬ」

下した命令が遂行されずにほっとかれる時点で国内も体面も総崩れしてませんか？まあ、あくまでも王様ですから、そんなに簡単に留守にするわけにはいきませんよね。

じゃあその、ムキムキマツチヨのお兄さんとかどうですか。軍人っぽいし。

「私は王家の方々のお食事を作らねばなりませんので……。」

あれ、コックさんだったんですか。ムキムキ筋肉はきつとフライパンふりふりの賜物ですね。失礼しました。

「僕もいけませんよ。水道管が壊れたらすぐに修理しなきゃいけません」

いや、あなたは指名してませ……

「あ、あたしだっていやよ。占い師はお部屋に閉じこもって修行するものなんですの。」

「おいらは弓の稽古があるのさ」

「えー……オレ唇切れてて痛いからパス。」

ホールが少し騒がしくなってきました。どうやらみなさん、サボり癖最盛期のようにです。

「あなたがいけばいいじゃない。」

ええ、私ですか？

「そうですね、あなた、飛べるし。」

はあ、確かに飛ぶオプションはついてるし、いざとなったら同行してもいいですよ。ただ火力はゼロです。

「そうか、火力を考えると役立たずなわけだな」

おい、そのあなた、話がまとまらなくてイライラしているようですね。（誰が役立たずじゃ！）冷静になるのも家臣の務めですよ。「王様、火力その他バランスを計算しますと、火力になる純戦士か魔法使いが一人ずつと、回復魔法が使える僧侶が一人が最低限は必要となります。」

先ほどから慣れた様子で王様と会話している賢そうな家臣がいまですね。大臣でしょうか。いくら大臣でもヤキトリが電卓を使っているのは不思議ですが。って、電卓使う要素あったっけ、今。

「純戦士は掘り返せばいくらでもいるな。」

「はい。では私は戦士軍のドミトリーその1からその18までの戦士達に召集をかけ、戦士を選抜してまいります。おい、占い師の娘さん、一緒に来てくださるか。」

「オーイエー」

先ほどネギマ姫救出作戦にノーといていた、紫の水晶玉を持った小柄な女性が飛び出してきました。ボタンと無造作に扉が閉められると、皆が顔を見合わせて、

「あの子、まだレバー大臣が好きなんだね。」

「一途な乙女だからねえ……」

あら、なんだか面白そうなラブストーリー。年離れすぎていますか何か。

「うむ。して、魔法使いだが……」

「王様、何かお心当たりでも？」

おお？なんだかレバー大臣と呼ばれていた人によく似ていますね。そうつぶやくと、たまたま近くにいた見事な羽帽子の貴婦人が

「あの方はレバー大臣の弟気味ですの。兄弟そろって頭がよろしくて、うらやましいわ。うちの子なんてね、このまえ三角関数と二次関数を間違えたんですよ、まったく、おほほのほ……」

そ、そうなんですか、それはそれは（三角関数って何だろう？）。

「おお！」

「何か思い出しましたか、王様！」

「そういえば王子の正式な婚約者、シオ姫は成績優秀だったな。彼女なら爆発的な魔法能力を持っているかも知れぬ」

シオ姫ですか。確かに、タレ王子とはいいいコンビかもしれませんね。ええ、勿論。名前見ただけですよ。

「シオ姫ですか。」

「うむ。彼女ならきつと火力は申し分ないし、寛大であるからすんなりとこちらの頼みを聞きつけてくれるだろう。よし、私はシオ姫の父君の所へ談判しに行こう。」

「王様、外交は外交大臣である私にお任せくださいませ。」

「いや、いいのだ。近頃あまり顔を見合わせていなかったからな。会いに行く機会がないものかと少し期待していたところなのだよ。もちろん君にも着てもらおうと思っているが」

「はい、勿論です王様！」

「して、最後は僧侶だが……」

あれ、王様、手詰まりですか？

「回復魔法を使うヤキトリなんていたっけ？」

え……えっ？何？

「いや、ヤキトリってカロリー高めのエネルギー源みたいなものだからさ、疲労回復効果はないんだよねー。」

ああ、なるほど。そういうことですか。今更何を言い出すかと思わず身構えちゃいましたよ。

「王様、私の兄はいかがでしょうか？」

「レバー君か……確かに彼は、回復薬の効力を何倍にもあげることができ、無敵シールドをはれるエクセレントプリーストと聞き及んでいる。」

「弟の私が申し上げるのも大変恐縮ですが、兄はヒーラーの中ではかなり高い能力を持っています。」

レバー大臣ですか……。

確かに難しい魔法を覚えていらっしやいそうですが、いかにも頭脳労働専門って感じの人です。筋肉に乏しくて、プレミアム感漂う金系の飾りがついた赤い重厚なケープの影からのぞく腕は、もやしとごぼうを足したくらい細いのです。ダメージを受けたら死んでしまうのでは？

「ナレ子君、うそをつくのはやめなさい。レバー大臣に腕はありません。それとケープも重厚じゃありませんから。彼が型崩れしたらどうするんだ。」

あ、ええ、ご無礼をお許しくださいな。カラダの比喻をするのは私のくせなんですよ（畜生、やりにくいんじゃないや我え！）っていうか王様の口調、さりげなく一瞬変わってたよね？なんかみんな全く持って気に障ってないようですけど。

「お、王様！」

あらま、噂をすれば影がさす。息せき切って話題のターゲットがホール扉を打ち破って来ました。打ち破って……え？おい、コラ！「レバー大臣、戦士は集まったか？」

「それが、じつは……」

あーちよつと、ひそひそ話しないで下さいよう。私には仕事というものが……。

「何、皆精神病で部屋から出てこないだと！」

ねえ、今のひそひそ話の意味なんだったの？

「寮長は扁桃腺で寝込んでいるだ！」

こつという世界のお約束、耳打ちのあとのリピートというのは？
どうやら戦士さんたちは全員『戦場にどうしても行きたくないせ

つかくの日曜日なんだから休ませてくれ病』に感染している模様です。そのウィルスは非常に感染力が強く、ナレ子は近く王様に代わってパンデミックを宣言する予定であります。

「ナレ子君、ぼんやりしているようだが大丈夫かね？」

はっ！ご、ゴメンナサイ。ぼうつとするのも私の務めでして。

「咄嗟の言い訳モードはオフにしてください。」

アイムソーリー。

「して、戦士はどうしたのか。」

「私が行きましょう」

名乗り出たのはなんと。

「た、タレ……。しかし、お前は六日後に修行過程上級終了テストが控えている身。それに受からねば、戦場に行くというのは許可できぬ。」

「父上、そこをなんとかお願いします。僕の婚約者なんですよ？ 姫を守る人は、どの国でも同じです。お願いします。」

「タレよ。ネギマ姫はあくまで補欠であるからして、ぶっちゃけほつといたってダイジョウブイッ」

ゴスツボキッ

「うわああああ！」

ピー

〈T A K E 2〉

「タレよ。お前の気持ちはよくわかる。しかし、戦場に行くために日々精進を重ねている他の見習い戦士にとっては、ずいぶん不公平な話だとは思わぬか」

「父上、僕は寝る間も惜しんで毎日毎日努力してきました。いざという時、役に立ちたいと思っていたから」

「タレよ、お前だけ特別扱いするわけにはいかないのだ」

「父上はたった一つしかない特別な命よりも、名誉のためのテストの方が大事なのですか！」

王様は難しげにうなつて、うつむいてしまいました。王子の心得の正しさと、公平・公正という自分のポリシーとが心の中でぶつかり合っているみたいです。え、急展開でわけのわからないシリ阿斯ムードですって？ 私にはわかりません。え、わかってるってば！このナレ子さんが、場の空気をりか、理解できないなんてありえないもん！わかってますよ！

「父上、お願いします」

「うーん。確かに今は人の命が懸かってるし、魔王の問題もいずれどうにかせねばとは思っているが。なかなか難しい、うつむ。」

王様、いいじゃないですか。王子の剣の腕は確かなものですよ。大体毎週日曜日に精神病患ってる戦士と王子に公正なルールなんて必要あるんですか？

「そうかつ！」

あ、今王様の脳内に今世紀最大のアドレナリンが放出されました！

「テスト初級に受かってれば戦場いけるんだった！」

……はい？

「すっかり忘れてた。昨日たまたま、気分転換に律令変えたんだっただよ。中級はただの名誉賞になったんだ」

え。ええ？！What!?

……王子と私、とてもまじめに王様のこと説得してたんですけど。王子とか、深夜に勝手にジムに入ってる秘密ばらしちゃったんだけどー？

「いやはや、なんとも、いや、ありがたいありがたい。」

何もありがたくないですよ。私たちが今使った大事な何か返してくださいよ。ホラ、王子も落ち込んでますよ絶対。

「よし、じゃあ今から戦場に行くぞー！」

王子様切り替え早っ！

「おおー！」

あんたら戦場いかないでしょ！？ノリで雄たけび上げるんですか、ここのヤキトリは。

「じゃあ王様、僕、行ってきます！」

「ああ、気をつけて行って来い！」

待って下さい。あなた達のペースについていきません。え、何？
もう嘘つきません。自分の気持ちに正直になります。『ワカリマセ
ン』。

「我が子よ。大志を抱け」

王様、今の状況を教えていただけませんかでしょうか。

「子の成長を心から祝福している父の姿だ。……今夜はお赤飯だな」

王子はお一人でどこに行っただんですか？

「父上！」

あ、王子が帰ってきた。

「どうした、愛しいタレよ」

「魔王の城へはどう行けばいいんですか？」

それがわかったら苦労はしません。

「ちよつと待ってて、今アドレス帳調べるから」

アドレス帳に乗ってるんですか？！

「この前会った時アド交換してもらったんだよねー。あ、あったあ
った。GPSでポチッと検索が今流って感じ。」

この世界は自由すぎです。

前編。(後書き)

水谷風狼です。お久しぶりじゃないけどお久しぶりです。
お久しぶりってカッコイイですよ。うん。

えっと作者がシリアスを書いてたらだんだん脳内が曇天になってきたので

ギャグをのつけてみた。

後編だか中編だかに続きます。

ナレ子はまだまだ苦労しそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3369p/>

ヤキトリ王国ストーリー

2010年12月5日23時40分発行